

---

# ルース・ベネディクトと名乗る者。

ハルメク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルース・ベネディクトと名乗る者。

### 【Nコード】

N7513A

### 【作者名】

ハルメク

### 【あらすじ】

自分のことをルース・ベネディクトと名乗る者がいた。

(前書き)

前書き

「自分の感情で、暴力を振るう人間っていうのは人間性よりも動物性がまさった脳味噌を持つてんだよ。解るだろ？ K。お前はそういう人間にたくさん会ってんだろ」

自分のことをルース・ベネディクトと言う友人がそんなことを言っただ。

動物性の脳味噌を持った人間というのは僕の通っている県立高校に居る生徒たちのことだ、とルースは言いたいのだろう。全員がそうであるわけではないのだが、僕に何かと言いがかりを付けては暴力を振るう人間が多数、いる。まったく詮無いことである。

「まったくお前も悲惨だよな。俺が言っただろ？ 高校は良く考えて選べって。目を瞑って掲示板に列挙されてた校名を当てずっぽうで指差して決めただろ、お前。碌に調べもせず劣悪な環境だつて気づかないなんて、悲惨の骨頂じゃんか」

なぜルースが他人事みたいに僕のことを言うかというところのルース氏は僕と違う高校で、それも県内トップの進学校に通う御身分だからだ。

「自分でも解ってるんだよ。悲惨の骨頂というより愚の骨頂……。ほんと、僕は愚かで先見力など皆無。ひねくれてた当時の僕が悪いんだよ。ほんと安易な決め方をしてしまった」

僕が言つとルースは溜息をついた。

「なんであの時俺と同じ所にしなかったんだよ。お前なら受かってただろ」

「・・・指がそこを指していればそうだったかもね」  
ほんとひねくれてんな、とルースは言った。現在形である。

「そいでさ、僕の学校のやつらの脳味噌のことばかり言うけどルースの学校のやつらはどうなのさ？ 同じようなものでしょ？」

「まあ、おんなじだな。学力以外は。」

言い寄ってくるやつらは居たがもう二度と来られないように両方の犬歯を折ってやった」

はははつとルースは笑う。

よくそんなことをして在学できているなと思う。

しかしそこはルースのこと、巧く隠蔽しているのだろう。

・・・つと、ちよつと待つてほしい。

こいつ自分で言った動物性の脳味噌を持っている人間は自分であるということに気づいていない。感情で人の犬歯を折るなんて人を殴るよりも悪い。僕がそう指摘すると、「感情じゃない。俺がやつらの犬歯を折ったときなんか至極冷静だったぜ。つまり一つの作業としてやったんだよ。ほら、土とか服に付いたらはたいて落とすだろ？ あれとおんなじだ」

と言った。 歯を折られた人に同情する。

「デレデレした態度がムカつくんだよ。だから躰をしないと。まあお前は俺のことをそーゆーふうに見ないから俺はお前のことが好きなんだけどな」

ルースが微笑みながら言った。

「もうちょっと女の子らしくしようよ。せっかく可愛い顔してるんだから」

「おや、おやおや。君はもしかしてこの顔がお気に入りにかな？　むうー、じゃあキスしてあげようかっ」

口をすぼめて迫ってきたので僕はルースを避けた。

「いらんわ。そういうところがダメなんだよ」

「どれにしようかな、で高校を決めるヤツに言われたくねえ。．．．  
なあ大学は一緒のところに行こうぜ。お前は何処受けるつもり？」

「私立×××大学の文学部」

あまり間を空けずに僕は言った。

「ふーん。名門だね。俺もそこにするかな。興味はあるしね」

「．．．そう。でもあまり人に合わせないほうが良いよ。自分の行きたい大学に行ったほうが．．．」

僕は言ったがルースは聞いていないみたいだった。

ルースは立ち上がり言った。

「絶対、一緒に行こうな」

そう言うつと自分の家のほうに行ってしまった。僕はルースと話して気が楽になった。ルースには何でも話すことが出来る。だからと言って恋人になるわけではないけれど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7513a/>

---

ルース・ベネディクトと名乗る者。

2010年12月26日02時24分発行